

東京外語大教授 中嶋 嶺雄



国際会議で自己流英語

話し方より中身が肝心

外国人の来訪やインタビュー、国際電話、海外との通信、同僚の外国人教師との会話、授業での英文講読、さらに英語での講演や執筆など、気がついてみると、毎日のように英語を使っているけれど、実を言うと私の英語はまったくの自己流である。

当今ではあまり例がないと思うが、私は高校（長野県立松本深志高校）で第1外国語としてフランス語を選んだ。同校では英語以外にドイツ語とフランス語が正課にあったからである。私はフランス語で東京外語大を受験し、中国科に入ってから中国語を専攻した。英語は受験勉強をしていないこともあって、仮定法などは今でもよくわからない。

●満席飛行機で苦しい思い

大学を卒業して世界経済研究所へ入るときには英語とフランス語の試験があり、入所してからは英語、フランス語、中国語の新聞や雑誌を毎日のように翻訳させられた。こうした経験を3年間積んだためか、大学院（東大）の入試は難なくパスすることができ、大学時代に成績のよくなかった中国語にも抵抗感がなくなった。

しかし、いずれの外国語も話す方はさっぱりだった。昭和42年に初めて訪米し、ウィリアムズバーグの日米円卓会議に出席したときは、米国側のD・リースマン、E・ライシャワー教授らそろそろたるメンバーを相手に、外国体験の豊富な日本側代表が流暢（りゅうちょう）な英語で対応しているのを見て、留学体験すらもたない私は、大いにコンプレックスを感じたものである。会議が終わってナイアガラ瀑布（ばくふ）を見に行ったとき、帰りのニューヨーク便の飛行機が満席で、係員が“Standby”（スタン・パイ=待機）と大声で言う。今日なら子供でも知っているこの言葉の意味がわからず、一瞬、席がないから「立って

行け」というのかと思った。結局、その日はニューヨークに帰れず、次の予定地ニューオーリンズへ飛んだのだが、荷物をニューヨークの空港に預けておいたので本当に困ってしまった。ニューオーリンズから必死になって電話をかけ、とにかく回送してもらおうことができたのだから、その程度には英語が通じたのであろう。20年昔の苦い体験である。

●辞書はいつも鞆の中に

そんな私が初めて国際会議で英語のスピーチをしたのは、45年にモスクワで開かれた国際歴史学会の席上であった。この会議は大変大きな国際会議で、日本からも多くの歴史学者が参加していたが、日本人はほとんど発言せずに押し黙っている。そこで恩師の江口朴郎先生が「ここはひとつ、中嶋君のような若手が何か発言すべきですね」と言われたので、私は思い切ったつたない英語でソ連の学者に論戦を挑んだのであった。

あれ以来、数多くの国際会議に出るようになり、ときには中国語、フランス語を使うこともある。しかし、講演や報告で質問せめにあったときなど、それが終わると、ちょうどスケート靴をぬいで大地に足をおろしたときのような解放感にとらわれる。辞書を鞆に入れておき、わからない単語はその日のうちに必ず引くという日課は今も変わらない。

それでも日常会話などは下手で、AFS（アメリカン・フィールド・サービス）の留学生として米国滞在経験のあるわが子にいつも笑われる。とにかく語彙（ごい）を並べて忠実に表現すれば通ずるのだから、問題は流暢に話せるかどうかではなく、その本人がどれだけ語るべき内容をもっているかどうかにかかっているのだ、と半ば開き直っている昨今である。

私の外国語体験